

佐世保第一海兵团主計兵体験記

香川県 塩田 潔

私は大正十（一九二一）年四月七日、塩田家の長男として生まれましたが生来、病弱で苗羽尋常高等小学校に入学した時は乳母車に乗せられ先生に挨拶しただけで帰りました。五年生の三学期に父が亡くなり母が一人で私と弟二人に妹一人を育ててくれました。

昭和十一（一九三六）年三月二十六日、小学校を卒業した翌日から地元の石井醤油醸造所に就職（寄宿）して一社会人となりました。青年学校に入学して昼間は工場で働き夜間は学校で勉学に励みました。昭和十六年五月二十二日全国青年学校生徒代表の御親閲式が東京宮城の二重橋前広場で行われ参加しました。

同年の六月十五日徴兵検査の結果、第一乙種合格となりました。その時の徴兵官が高松連隊区司

令官葛目直幸大佐でした。大佐はその後、南方のピアク島で玉砕され二階級特進で中将になられました。

徴兵検査が終わって待つこと一年三カ月、佐世保第二海兵团に昭和十七年九月一日主計兵として入団しました。早速釣床の釣り方と格納法を教えられました。

志願兵との混成の練習分隊で、三百六十九人が九一、九二分隊に分れ各分隊が十二教班に編成され、私は九二分隊の第二教班に入りました。第二教班は十四人で教班長は海軍二等主計兵曹深川八郎でした。新兵は早速に上官の官職氏名を覚えるように掲示されました。掲示板には、佐世保鎮守府司令長官海軍中将谷本馬太郎（十七年十一月病没）、佐世保第一海兵团長海軍大佐太田實（のちに沖繩で玉砕）、以下二十人の上官の氏名が掲示されていました。

翌九月二日から連日新兵教育が始まりました。

十二月十日午前、退団式、午後には第一海兵团

に着いて十三分隊（主計科）に編入され、第一海兵団付きとなりました（百四十二人）他の二百二十七人は艦船に配乗かまたは南方基地、航空隊等に配属され、勇躍第一線に行きました。

佐世保鎮守府司令長官 海軍中將 南雲忠一

同 海兵団団長 海軍少將 工藤久八

同 主計長 海軍主計少佐 森田新吾

第一海兵団の日課は戦争中にもかかわらず平穩な毎日でした。旧兵の新兵はやはり毎日が競争であつた。少しも気を緩めることは出来ない。明直に当れば一時間も早く起きて炊炊所ほうすいじよに出て炊事の作業に掛かり先任から追い回された。寒い朝も我慢、冷凍の鯨肉を切るのも苦勞しました。手を切つても血を見せてはいけない。手拭てぬぐいできつく傷口を巻いてやりました。

配食も元氣よく、デツキ流しも一斗樽（蓋なし）で水を流して片付ける。実施部隊における食事は将兵教育期間中に会得した基本調理は海兵団にいる間は一度もやりませんでした。

毎日の日課は心身共に楽ではなかつた。増加食はなくなり、空腹勝ちで外出（日曜日）は半数上陸で、海仁会集会所に行ってパンや汁粉を食べるのが待ち遠しかつた。同年兵とは本當に生存を共にする仲で、何かにつけてよく話し、精神的にも慰め合つたものである。

佐世保は軍港の町でどこへ行つても海軍軍人の先輩ばかり、敬礼することを怠つては欠礼をして罰が与えられた。特に巡邏じゆんろは厳しかつた。戦況が厳しくなつて来た事は、若い兵隊や私達も知る余地は無かつた。艦船が出港する又寄地部隊の要員として出発する者の見送りの何回となくあり、見送りの位置にいて同胞を見送る者として武運を祈り、出来得ればその戦果を期待する気持ちは誰しも同じであつたと思う。

佐世保海兵団を巡る構内に桜の花が咲きました。軍隊に入つて始めての春、花見で浮かれることなど毛頭考へる余地ありません。五月になつたある日、新兵教育期間中（十七年十一月二十二日）

に受検した経理学校普通科経理術練習生の合格を知らされました。

昭和十八年六月一日、東京芝浦埋め立て地に開校と同時に海軍経理学校品川分校に入校しました。全国各鎮守府から参集して、一等主計兵から一等下士官までの階級の者が約七百五十人、第七十五期普通科経理術練習生が各分隊に組分けされて、その課程の教育を受けました。佐世保からの同年兵も何人かは同じ分校にいたけれど、若い兵隊（階級も最下級）である私らは、なかなか自分の思うように勉強は出来ませんでした。

毎日の食事番から外出も少なく、七里ガ浜での陸戦演習で弁当を持たされるなど思いがけない苦勞がありました。経理術の専門職になるに、それに必要な科目で毎日のように珠算（四つ玉）練習これは海兵团当時から引き続き実行す。金銭計算から旅費会計の要領など、又新たに一時間余りの邦文タイプライターがありました。卒業するまでには一人前にはなれなかった。小学校の皆さん

が送ってくれた慰問文のお礼の返事の文章を打つ程度でした。

外出はほとんど銀座に出て散歩、それから明治神宮や靖国神社に参拝、東京は広く滅多に上級軍人に会うことはありませんでした。

米軍のガダルカナル上陸作戦が展開され、その後、ソロモン海戦からサボ島沖夜戦において史上初の電探射撃を受け、日本海軍はことごとく沈没か損害を受けたのは私らが将兵教育期間中のことで、その後もガ島奪回作戦の失敗は米軍の補給力に負けたと言えよう。

六月五日山本五十六元帥の国葬が行われ入校して間もない私等も団旗のなびく葬列に参加、砲車に乗せられた遺骨を見送りました。

海軍では入団以来、習得した各科目について必ず試験があり、進級の場合も同じで、これらを全部考課表に記載され退団するまで各分隊士、又は分隊長が記入されて、これは絶対に個人には見せてくれないのです。

九月二十八日に経校育経練習生教程を卒業、佐世保海兵団付きを命ぜられ佐世保に帰り、佐世保警備隊の応努に勤務、上等主計兵に進級しました。

ある日、上司より勤務先を千歳航空隊か鎮河防備隊の、いずれかを希望するかと問われたので、鎮海防備隊を選び、十一月二十日入隊しました。

場所は朝鮮広尚南道にあり海軍に入って初めて関釜連絡船に乗船、単身赴任でのち艦船に乗り組むことはありませんでした。鎮海は海軍の要港であって、内海湾を何倍か大きくした、また内海湾によく似た地形で、要港としては最適の港でした。防備隊司令長官は山口儀三郎海軍中将でした。私の仕事は公務給与、事務的仕事で、海軍省や人事部からの書類（軍極秘）を司令から関係分隊長に回覧、通達発送、給料の支給等であった。

基地として釜山には敷設艇「加徳」「黒島」が港湾警備隊として、木浦には十五、十六掃海艇を配船、各見張所にも派兵していました。鎮海は内地とほとんど変りなく、道路の両側に桜とポプラの

並木があり、故郷が思い出された。

昭和十九年五月一日、兵長に進級。昭和二十年五月一日二等主計兵曹に進級すると、鎮海海兵団にて一カ月の初任下士官特別教育を受けました。

そして任官と同時に志願兵籍に編入されました。

海軍公報で故郷小豆島に昭和二十年六月、小豆島突撃隊（海軍嵐部隊）が編成されたことを知りました。戦況は益々きびしくなり硫黄島、沖縄は敵手に落ち、本土空襲の激化、そして広島、長崎への原爆投下、更にソ連の対日参戦があり、ついに昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送により戦争は日本の敗戦となりました。隊内でも全員にラジオを聞くよう庁舎前に整列していました。雑音が入って、はっきり聞きとることが出来ませんでした。

かくして、ここに三年八カ月にわたる太平洋戦争は終わりを告げることになりました。南朝鮮にいた部隊や残り少ない小さな艦船は平静を保ち、九月十三日、雨の中を米進駐軍十数人、カラーの

雨衣を着て隊内を巡視、私は公務室の前で迎えましたが無事点検も終わり、想像以上の平穏さでした。

準士官室には数十本以上の日本刀が積み重ねてありました。その後の隊内生活は何の変化もなく続けられ、南朝鮮における連合軍の進駐、戦争の収拾は、予想以上の秩序を保って行うことが出来ました。

その後、阿南陸相の自刃や抗戦を叫ぶ陸軍の一部の騒動があったようですが、我が鎮海防備隊では内地送還の作業を開始しました。混雑を極めた内地の社会情勢の中に、隊員の応召兵、服務延期者、若い兵隊と順次、船の都合がつき次第に会員名簿を作成し、また士官、予備士官については海軍大臣宛、特務士官、準士官はそれぞれの在籍していた鎮守府司令長官宛に、帰郷先を記した会員名簿を作成して、所轄海軍人事部長宛送付しました。かくして各員それぞれの帰郷先に向かって復員して行ったのです。

日が経つにつれて鎮海の各部隊は解隊し、内地に引揚げてついに軍需部も閉鎖しました。千人余りの兵員が駐留する防備隊では、米穀類や冷凍品乾物は充分に貯蔵していました。また生鮮食料品は市中に行けば容易に購入することが出来ました。味噌と醤油は馬山にある丸金へ買いに行くことになりました。

烹炊員三人と馬山の丸金醤油ヘランチ（汽艇）に容器を積んで行きます。醤油はドラム缶に十本、味噌は四斗樽に十挺詰めて帰隊するのですが、十月上旬の防備隊解隊までには三回受け取りに行きました。

隊員の内地送還は順調に進み、十一月に入り、私は先任ら五人で博多に帰り、駅前の旅館に投宿して残務整理の任に就きました。

約一カ月間、鎮海防備隊から残務を終えた者を迎え内地各地への帰省の手続きを取りました。皆別れを惜しみつつそれぞれの家路へ急ぎ帰って行きましたが、熊本出身者の中には、臭いのきつい

芋焼酎を持って再び挨拶に来た者もいました。

この間の旅館の宿泊料は、事前にかます吠入りの米を旅館に送り、物々交換で賄ってもらい、毎日の生活に当てていました。

町の中は混雑を極め、道行く人の服装もまちまちで、その姿に哀れさを感じる場面もありました。港では復員や引揚者に乗せた船が入港した時は、一時的な賑やかさはありませんでしたが、その人たちの気持ちは決して穏やかではなかったと思います。

かくて日々の受入れ業務も無事に終えて、予定通り完了することになり、宿の部屋の整理や書類の後始末、最後に鎮海防備隊の庁印と同司令の職印を郵便小包にして海軍省に返納して、残務整理の五人もそれぞれの郷里へ帰って行きました。

私は十二月十三日夕、三年四カ月振りに我が家にとどり着きました。現役の海軍軍人として入団してお国のために御奉公申し上げる覚悟はあったものの、艦船勤務も戦場へと一度も行かずに戦争は終わり、日本は敗れました。

先の太平洋戦争が日本の侵略的意図によるものかどうかの議論の可否は差し控えますが、私が海兵団に入団して新兵教育訓練を受け、心身の鍛錬に努め、一人前の軍人になる。そして日本国のために御奉公しようと誰しも心に念じ、努力したものです。

毎日の軍隊生活がその人の精神を、また身体を変えていったかも知れませんが。朝起きてその日のスタートは先ず「お早ようございます」の挨拶は絶対に欠かしてはいけません。上司に対してはもちろん、同年、または下級の者からの答礼も丁寧にすることにこしたことは無いが、簡略して「おす」と発声して済ませることもあります。これで結構気持ちは通じるからです。

留守宅の母と妹は男手なしの生活で相当苦労したようですが、私ら男子が皆無事に復員しましたので一安心したようです。次男の純は昭和二十一年二月に復員しました。三男の久は病気で復員し、昭和二十一年九月二十一日国立徳島療養所に入り

闘病十年後の末病死しました。

海軍通信兵の歩いた道

滋賀県 加藤 吉 男

祖国防衛のため多くの人々が尊い命を捧げられ、私はその姿を多く見ました。私自身も生死の境をさまよう体験もしました。この事実を後世に伝えるため私は語ります。

私は大正九（一九二〇）年十一月二十九日、石川県七尾市で加藤家の三男として生を享けました。七尾市の男児尋常小学校を卒業し、昭和十三（一九三八）年満州国に渡り、南満州鉄道（満鉄）に奉職し、北朝鮮の清湊駅を皮切りに満州国の吉林駅などの駅員として勤務しました。

昭和十二年七月七日、勃発しました支那事變の關係で、隣国である満州国は日本軍への物資の輸送等重要な役割を果たしておりましたので満鉄の仕事は緊張の連続でした。

昭和十五年五月、私は七尾市で徴兵検査を受け